

芸術と教育Ⅵ

— 表現力の育成とギャラリーの活用 —

筒井 通子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Art and EducationⅥ : Cultivating Expressive Power and Effectively Using a Gallery Michiko Tsutsui

Naragakuen University Narabunka Women's College

幼児教育にとって、これらを担う教員の資質能力の向上が重要である。また、教員となる際に最低限必要な基礎的・基盤的な知識・技能を学んで身に付けることが必要である。そこで、子どもを育てる教育にかかわろうとする者が、豊かな感性や表現する力をもった子どもを育成できるように、美術教育としての鑑賞教育で、「表現力」をもてる術を考案するとともに、その活動から教員の資質としての豊かな表現力を育む方策を提案する。

キーワード：芸術と教育、ギャラリーの活用、人格形成、表現力、鑑賞教育

1. はじめに

幼児教育では基礎的な知識や技能の獲得とともに、「感じる」とか、「感じとる」という感覚面を体験的に学んでいくことと、「伝える」「表現していく」ということが重要である。

幼稚園教育要領の第2章の「ねらい及び内容」の「表現」の中に、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とある¹⁾。

保育者は、幼児期にふさわしい生活の展開をし、遊びを通しての総合的な指導をすることが重要である。幼稚園教育要領第1章総則の第1「幼稚園教育の基本」の内容の趣旨に「幼児の発達、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」²⁾とある。

保育者の役割は、幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成したり、物的・空間的環境を構成したりしなければならない。まず、保育者が、豊かな感性や表現する力をもつことが重要である。保育者が、「感じたこと」や「考えたこと」を自分なりに表現できて、豊かな感性や表現す

る力をつけるとともに創造性を豊かにする必要がある。また、幼小の接続で、小学校の学習指導要領で、新たに規定された目標には、「創造力」があり、学力の重要な3つの要素の中には「表現する力」を育むことも書かれている。

筆者は、独立行政法人国立美術館が行っている「美術館を活用した鑑賞教育についての指導者研修」の一期生である。この研修を受けてから本年度12年目となる。その後、平成20（2008）年、国際美術教育学会（InSEA 世界大会 in 大阪2008）で筆者は「小学校教育の中での美術教育の重要性」を述べた。

そして、この11年間、「鑑賞教育」の重要性と「芸術と教育」の関連性を「芸術と教育Ⅰ～Ⅵ」として検証するとともに、保育者になろうとする者への「鑑賞教育」を行っている。

「鑑賞教育」の充実に関する研究は、2005年から現在に至っている。それは、人格形成の一翼を美術教育が担っていると考えからである。

図1は、書道、絵画、造形表現「新聞紙で制作した犬」を活用して教育をする一例である³⁾。



図1 「芸術と教育」

今回は、ギャラリーを活用して造形活動への意欲付けと表現力の育成の方策を提案する。

2. 「鑑賞教育」と表現力

2.1 「表現力とは」

幼児に育成すべき表現力とは、「感じたこと」や「考えたこと」を相手に自分なりに伝える能力である。生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しみながら伝えられること、また、「楽しい」「うれしい」等の感動がそのまま自分なりに「伝える」ということである。作品づくりではなく、そのプロセスを大切にすること。

2.2 「環境設定」

表現力を育成するために保育者は、環境整備で工夫をする必要がある。園児の作品を大切にし、クラスで自然に作品を見ることができるよう「場の設定」をするのである。

美術鑑賞は、成長期の子どもにとって芸術文化に触れ、「豊かな感性」を育むことができる一つの方策であるが、地域によってはなかなか美術館へ出向くことができにくい場合がある。園で簡単な「ギャラリー」を作ったり、地域の「ギャラリー」と連携したりする掲示環境も一つの試みである。そうすることによって、絵のある場所での会話、「ギャラリートーク」も可能になる。子どもたちは、友達の商品からのメッセージを受け取り、それが刺激となっていく。

今回は、鑑賞をするための環境設定の仕方を知る方法の一つとして身近な絵画作品の展示とする。鑑

賞の場所を地域のギャラリーと大学アトリウムとし、身近な人物の制作したものを展示・鑑賞することで、親近感をもちながら、感動、共鳴、共感をし、表現することへの意欲につなげる。

2.3 芸術と教育との関連

芸術を通して、学習者自身が自分で「作品解釈」をしていき「思考力」、「創造力」やがては、「問題解決能力」をもつことへと進み、概念を構成していく。

「芸術と教育Ⅰ」で、芸術を通して「豊かな人間性の育成」と「人権教育の推進」をする方策の一つを提案した。そこで、「美術館の活用」をあげて、美術館の本来の機能を生かしながら、自他の生命と人権の尊重をアレルギーの飼い犬の絵画「じろこ」

(図2)を展示したコーナーで提案した。また、今回、筆者は保育者を目指す学生に「芸術と教育」について、絵画「おまえがいたから」(図3)「夢と希望」(図4)や「新聞紙で作った犬じろこ」(図5)を使って幼児教育の基本である人権教育についての授業をした。心を込めて表現した絵で話すことは、人の心をゆるがす大きな力があり、意見交換が活発化する。(図6)



図2 障害のある犬「じろこ」の絵

幼児に話すときにその表現力を生かすことで教育の目標をより達成することができる。保育者になろうとするものに「じろこ」の造形物や絵で話すことにより、本時の目標に近付くことができる。以下に実践の感想を示す。



図3 絵画「おまえがいたから」



図5 新聞紙で作った犬「じろこ」



図6 絵を見て話し合う学生



図4 絵画「夢と希望」

<p>先生の話を聞いて、人権について改めて考え直すことができました。</p> <p>じろこの話を聞いていると私もすごく悲しくなりました。</p> <p>しょうがいがある毎日大切にしてくれているじろこはとて優しく思っていると、どんな状況でもお世話をしている先生は素晴らしいなと思いました。</p> <p>子どもも、しょうがいがあるかもしれないけれど、保育者になっていくにあたっていろんなことを考えたいかなと決めたいなと思いました。今日先生のお話を聞かせていただけて、いろんな事を感じることができました。これから、芸術の基礎などいろいろな事を吸収していけたらいいなと思いました。私は将来保育士になりたいので人権を大切にして頑張っていきたいです。</p> <p>これからも、じろこが元気に育っていてほしいです!!</p> <p style="text-align: right;">学生の感想</p>

今日は初めての授業で、岡井先生が「じろ」の話をして下さいました。じろこと先生の物語を聞いて、じろは本当に辛抱強く、とても心の強い犬だなと思いました。岡井先生も「毎日こんな遠くまで通って、お昼の時間に戻って、とても疲れているのに（じろの話を）して忙しい中で頑張っている」と思いました。岡井先生の描いた「お前がいたから」の絵画を見て、先生から私たちに伝えたい事がとても伝わりました。この話を聞いて、この1-Aのクラスの仲間を大切にしようと思うのと同時に、飼育者にならば、大切なことを辛いこともたくさんあると思うけど、そんな時は、この話を思い出して頑張ろうと思いました。じろがこれからも長く元気に生きられるように心の底から願っています。

今日は第四回の授業でしたが、人間、子ども動物に対しての接し方を、じろを通して知る事が出来た良かったと思いました。私も犬を飼っていて言葉の通じない犬でも顔の表情や、しぐさでも個性があって接し方、理解してあげようとする自分自身の気持ちや、とても大切な事なんだと感じました。先生みたいに絵や造形で子どもに何かを伝える保育士になければならないと思いました。この授業で色々なものを吸収して、発信できるよう頑張りますのでよろしくお願いします。またじろこの話聞きたいです。blog します。

3. ギャラリーの活用

3.1 ギャラリーへの展示に向けて

園での掲示を意識して、アトリウムで、自分たちで自分たちの作品を掲示する。また、鑑賞者が能動的に行動できるように考える。

「ギャラリー夢&トーク」と名付けたギャラリーと「芸術と教育」を研究するための施設「奈良芸術と教育研究所」

(HP:<http://sky.geocities.jp/yumetokibousky2/>)

(図7) にどのような作品を展示するかを考える。

あべのハルカス近鉄本店アートギャラリーでは、作家の作品の鑑賞とする。



図7 「ギャラリー夢&トーク」写真左
「奈良芸術と教育研究所」写真右

3.2 内容と方法

絵画作品や学生の作品の鑑賞し、評価を行う。また、自身の解釈や感想を書くことも取り入れる。その評価で高評価だったものを「ギャラリー夢&トーク」で展示する(図8)。そのことによってより感性豊かな表現への意欲が生まれる。全ての作品は、アトリウムで展示する。



図8 「ギャラリー夢&トーク」での展示

3.2.1 絵画作品の鑑賞

作家（筆者）の絵画作品に関しては、対話式鑑賞を取り入れる。絵画を観て知ったこと、気付いたこと、理解したこと、疑問に思ったことを鑑賞者と制作者がその場で受け答えをする。それらが、表現力の向上につながる。鑑賞者自らが自分の解釈も語る（図9）。その「ギャラリートーク」の繰り返しが、表現力・創造力・感性の豊かさにつながっていく。下記に「アートギャラリー」の展示風景と鑑賞者との交流（図10）、鑑賞後の学生の感想を挙げる。



図9 絵画作品の解釈を語る鑑賞者



図10 制作者(左)と鑑賞者の交流

学生の感想

画展を見た後、影響を全身に受けて今すぐに絵が描きたくて描きたくて仕方ありませんでした。とてもよい刺激をいただきました。絵は技術だけではない、人間性ありきだと改めて感じました。自分も絵を描き続けて大きな人間になりたいと思います。

今日は、色に感動しました。自分が感動しないと子どもに伝えることがむづかしいと思いました。「色」も自分で決めつけていましたが、「心にある色」もあることを感じました。子どもには、のびのびとした表現ができるようにこれからも学んでいきたいです。

学生の感想から制作者の技術だけでなく、人間性を感じたり、色に着目して、視点をかえて表現しようとしていることが伺われる。また、「自分も描いてみたい。」という制作意欲につながっている。

3.2.2 学生作品展の工夫

学内のアトリウムで全員の作品を鑑賞し、ギャラリーで展示する作品を学生自身が選択する。評価基準は、鑑賞して、作者の意図が伝わり、感じる事ができた表現力豊かな作品とし、高評だったものを展示する。このことによって、制作段階で「伝え、表現する。」ことへの関心意欲が高まる。

また、地域の人々に鑑賞していただくことを伝えることによって、制作意欲の向上にもつながる。「鑑賞」は、その「イメージ」に対する「意欲・関心」を高めることができる。
以下が、学生のレポートである。

学生の感想

<p>自分の作品がみんなに見てもらえたことがうれしい。 みんなの個性が表現されているのがうれしい。 みんなの作品で、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。</p>	<p>みんなの個性が表現されているのがうれしい。 みんなの作品で、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。</p>
<p>みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。</p>	<p>みんなの個性が表現されているのがうれしい。 みんなの作品で、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。 みんなの作品を見て、自分も作品を作ることができた。</p>

4. 成果と考察

保育者になろうとしている者への「鑑賞教育」を6年間と、地域のギャラリーの活用を2年間続けてきている。「芸術と教育」については、幼児教育との関わりと「芸術」を通じての地域への発信等、鑑賞教育の活用を目指してきた。

「芸術と教育Ⅵ」では、園での環境整備を視野に入れて、「表現力の育成」に鑑賞教育とギャラリーの活用を中心に方策を提案した。その結果、アトリウムでは、「鑑賞教育」をするための展示を学生自らができた。描いた作品と配色を考えた台紙を考え、作品の背景の表現にも工夫が見られた。見る者に伝える表現をしようとしている。また、学生のレポートより、保育者になるために「鑑賞教育」が重要であるという理解にいたっている者が多くみられた。

「造形の基礎」の授業の自己評価で、「この科目で獲得を目指す力」の「習得状況の程度を明示するための指標（評価基準・判断基準）」として自己のレベルの三段階評価で平面表現でレベル1（カードの描き方を知っている）レベル2（色彩豊かに描くことができる）レベル3（自分の考えたことを相手に伝えるように描ける）とする中で、レベル1が1%、レベル2が10%、レベル3が89%、というレベル3に高い数値が得られた。また、家庭でも自主的に表現活動をしようとする姿がみられた。

表現することによって相手に伝えられることが分かり、今後、保育者として環境を整えたり、子どもと共鳴共感したりすることの重要性に気付いている。

5. まとめ

長年にわたって、「芸術と教育」を関連させて教育することへの意義について研究を続けてきた。その中で、ギャラリーの活用を昨年度から進めてきた。

自分の表現したいものを、見る側に「伝える」ことができたかを互いに評価しあい、投票で多くに伝えられたとされる作品を展示し、それらを鑑賞することによって、自己の表現能力を高めるのである。

そのために地域のギャラリーでの鑑賞も推進してきた。筆者は「みる」ことも表現にとって重要性であると述べ、その方策として、昨年度に引き続きギャラリーでの鑑賞を試行した。その結果、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、「豊かな感性」や「表現する力」が養われた。「みってから参考にしておく。」「つくってからみて参考にしておく。」という補完から相互補完になるのである。

また、多くの作品を鑑賞する中で、表現は皆が違ってそれを認め合え、自分の感覚を安心して表現できる場の設定が重要であると気付く。

このことから、保育者になったとき、子どもたちとどのように関わり、イメージを膨らませて表現したり、鑑賞したりするのかを知ることができる。また、指導者が目的をもって「鑑賞する機会」を子どもに与えるとともに、それらを継続することと、そのためには、自分自身が鑑賞する機会を多くもつことによってその能力を高めることができると理解する。

6. 謝辞

- あべのハルカス近鉄本店による情報提供をいただき心より感謝申し上げます。
- じろこへ

「芸術と教育」の紀要に毎回登場した「じろこ」、人権教育の大切さを教えてくれ、筆者の制作活動にも大きな影響を与えてくれました。2016年8月14日に14歳と2ヶ月で天国へ行きました。脊髄損傷の中、精一杯生きてくれました。「じろこ、ありがとう。そして、ごめんなさい。許してね。 みちこ」ここにこの紀要をじろこにも捧げます。



引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領第2章.
- 2) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領総則第1章.
- 3) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要「芸術と教育Ⅰ-V」: 第42-45号.

参考文献

- ・筒井通子 (2015) 「芸術と教育Ⅴ」奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要. 第46号: 151-159.
- ・筒井通子 (2014) 「芸術と教育Ⅳ」奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要. 第45号: 149-156.
- ・筒井通子 (2012) 「芸術と教育Ⅱ」奈良文化女子短期大学紀要. 第43号: 87-95.
- ・筒井通子 (2011) 「芸術と教育」奈良文化女子短期大学紀要. 第42号: 67-78.
- ・筒井通子 (2008) 国際美術教育学会誌2008「小学校教育の中での美術教育の重要性について」7pp.
インターネット<http://www.insea.org/>
- ・筒井通子 (2008) 教育美術P44. 財団法人教育美術振興会
- ・文部科学省 (2008) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導.
- ・厚生労働省 (2008) 保育所指針解説書.